財団法人

日韓文化交流基金 NEWS

特集

第14回日韓・韓日合同学術会議

「世界の中の東アジア文化 Ⅲ」

日韓共同研究フォーラム

日韓中高生交流事業

助成事業紹介

第3回全州散調フェスティバル

日韓地方紙交流フォーラム

no.20 2002

The Japan-Korea Cultural Foundation

日韓文化交流基金NEWS

● 目 次 ●

2 巻頭エッセイ
韓国現代美術の力学　古川美佳

表紙作家紹介および表紙作品題名

3 特集
第14回日韓・韓日合同学術会議
「世界の中の東アジア文化 Ⅲ」

6 調査ノート
日本における韓国・朝鮮研究 学会編
―― 研究大会レビュー

8 日韓共同研究フォーラム
第1次研究ターム文化チーム論文集刊行
第3次研究タームへの助走 ――

9 日韓中高生交流事業
― 鳥取県中学生訪韓研修 ―

10 助成事業紹介
第3回全州散調フェスティバル　康貞子
日韓地方紙交流フォーラム　渡辺幸英

12 日韓文化交流基金事業報告

表紙作家紹介

金賢姫（キム　ヒョンヒ）

1946　韓国京畿道生まれ。18歳の時から、刺繍家としての道を歩み始める
1984　第９回韓国伝統工芸展に入選。以後毎年、奨励賞、特別賞などの受賞を重ねる
1990　東京の髙島屋にて「韓国伝統工芸展」招待展
1994　国務総理賞を受賞
1995　東京の韓国文化院にて個展
1996　ソウルの一民美術館にて個展
1999　『韓国のパッチワーク～ポジャギ』出版（文化出版局）
現在、刺繍・ポジャギの「名匠」として作家活動を行うかたわら、伝統工芸建築学校にて後進の指導にあたっている

表紙作品

コースター

表紙撮影　縣　正三

巻頭エッセイ

韓国現代美術の力学

韓国美術・文化研究
古川美佳

いまや、私たちが韓国の美術家による作品に接することは特別目新しいことではなくなった。各種の国際展、二〇〇一年十一月に幕を閉じた「横浜トリエンナーレ」にも、韓国の作家はあたりまえのように参加している。

とはいえ、韓国の美術が国際的な動きを見せ始めたのは九〇年代初頭からである。グローバリズムの第一線にのし上がるまでに、この国の美術は歴史に翻弄されてきた。韓国にとって、近代の幕開けとともに輸入された「美術＝西洋のArt」とは、そこに日本の植民統治というフィルターが介在することによって、二重の屈折が加わった。解放後は、制度的には植民地の慣行を踏襲しながらも、失われた韓国美術の確立をめざす。

朝鮮の人々は、特に近代以降、民族離散や亡命など、いわば「流浪の民」の道を歩んでこざるをえなかった。それゆえ彼らは国を越境するしかなく、気がつけば多国籍的状況に類似しているという意味で、美術家の境遇も「国際的」であるとすらいえた。そして現在、韓国美術界は国際舞台へ躍り出ようと猛進しながら、民族主義的感情に引き裂かれるというアンビバレントを抱えている。そんな韓国史と芸術の力学を垣間見ることができるのが、「光州ビエンナーレ」である。

光州は、民主化運動の「犠牲」とその代価としての「栄光」を背負う地である。したがってこの地における文化―美術は、はやくから社会の構造的な諸矛盾に先鋭であるほかはなかった。こうした文化風土を舞台に九五年に始まった光州ビエンナーレは二〇〇二年第四回目を迎える。だが韓国美術界には、この文化装置の派閥抗争的な匂いに疲れ、ウンザリしてしまった「ビエンナーレ後遺症」と呼ばれる現象さえ引き起こした。いわば瀬戸際に立たされた四回目のテーマは、「止まれ、PAUSE」。総合的な指揮をとる成完慶（ソン・ワンギョン）芸術監督に加え、共同キュレイター二人は、公開討論を通じて決定された。また人員の約三〇％をカットするなど運営方法や組織の刷新が目立つ。さらに美術の公共性と文化的な疎通の拡大をめざす参加型プログラムも予定している。思えば成完慶こそ、八〇年代初頭、閉鎖的な韓国の美術状況に、「美術の疎通」を唱え異議申し立てをした人物であった。

テーマ「止まれ」は次の飛躍のための一呼吸、新たな価値観を瞑想しようという黙示録的な選択である。ここには、グローバリズムにあくなき追従を行ってきた現代美術に対する反省が込められている。韓国社会の「暴力的」とまでいえる変化の中で、ビエンナーレを治癒しようという苦肉の策でもある。いずれにせよ、韓国現代史が象徴的に集約された排除と復活の逆転劇の場である光州の、恨の蓄積と払拭の生成変化、痛みと治癒のダイナミズムが、光州ビエンナーレを蘇生させているようだ。極言すれば光州ビエンナーレは、いまここにある韓国美術の総体としての力学を浮き彫りにしてくれるのである。

ふるかわ　みか

早稲田大学卒業後、桑沢デザイン研究所を経て、現代美術の編集にかかわる。延世大学韓国語学堂修了後、東京大学教養学部地域文化研究科研究生、九三年より約二年半、在韓国日本大使館専門調査員。第三回光州ビエンナーレ「芸術と人権」展アシスタント・キュレイター、『美術手帖』などに韓国の現代美術や文化について執筆。

第14回日韓・韓日合同学術会議

「世界の中の東アジア文化 Ⅲ」

二〇〇一（平成十三）年十一月九日から十一日までの日程で、第14回日韓・韓日合同学術会議を韓国・ソウル大学校湖巖（ホアム）教授会館で開催しました。

今回の会議は、教科書問題をはじめ、ナショナリズム、日韓におけるポストコロニアルの諸問題など、先鋭的な同時代の問題意識を反映したものとなりました。

日韓・韓日合同学術会議は、日韓文化交流基金と、韓国側カウンターパートである韓日文化交流基金が共同で運営する学術会議である。一九八六年にスタートして以来、歴史を中心に多様な学問分野の研究者・専門家を招き、発表および討論を通じて、学術レベルでの相互理解を深めている。

今回は、「世界の中の東アジア文化Ⅲ」の大主題の下、内から外、外から内、そして東アジアを舞台に交差する視線の中での自己認識について、各セッションで発表・討論が行われた。

第一セッション

「韓国と日本から見た世界文化」

金度亨（キム・ドヒョン）氏の「近代韓国知識人の西洋文化認識と改革論」という報告ではまず、開港前後の知識人の西洋文化に対する認識を三つに区分して説明した。華夷秩序的世界観から脱却し、西洋を新たに認識し、西洋との通交と技術文明を受容しなければならないとした「洋務論」、日本の明治維新に影響を受け、西洋の技術文明のみならず、宗教・道徳まで受容して近代化を推進しなければならないとした「文明開化論」、開化論の非主体的・非民族的側面を反省しながら西洋文化を批判的に受容することを主張した「変法論」がそれである。当時の政府上層部や文明開化論者が帝国主義の侵略を正確に認識できずに近代化という論理に流されていたのに対し、植民地化の危機の中で台頭した変法論者は、帝国主義の侵略性を正確に認識した上で、民族文化を土台にした西欧文化の主体的受容を通じ、実学派の社会改革論を新しい共和主義的政治体制と民族武装抗争へと転換し得たと指摘した。

続いて、松本健一氏は、「ナショナリズムの中の歴史教科書―扶桑社版

●日程

11/9（金）

ソウル大学校奎章閣見学

歓迎レセプション

11/10（土）

第1セッション「韓国と日本から見た世界文化」

発表：金度亨（延世大学校史学科教授）「近代韓国知識人の西洋文化認識と改革論」

松本健一（麗澤大学国際経済学部教授）「ナショナリズムの中の歴史教科書―扶桑社版『新しい歴史教科書』をめぐって」

討論：衛藤瀋吉（東洋英和女学院院長）

朴贊勝（忠南大学校国史学科副教授）

司会：馬越徹（名古屋大学教育学部教授）

第2セッション「外から見た東アジア文化」

発表：徳永和喜（鹿児島県歴史資料センター黎明館主任学芸専門員）「薩摩藩の朝鮮通事―『漂流・漂着』と薩摩藩の対応―」

朴枝香（ソウル大学校西洋史学科教授）「英国と東アジア―近代と前近代の出会い」

討論：具汏列（梨花女子大学校政治外交学科教授）

田代和生（慶應義塾大学文学部教授）

司会：金容徳（ソウル大学校東洋史学科教授）

第3セッション「東アジア文化に対する韓国と日本の認識」

発表：崔元植（仁荷大学校人文学部教授）「ポスト65年のための断想―『秀吉一代と壬辰禄』を読んで」

竹中均（神戸市外国語大学外国語学部助教授）「柳宗悦と朝鮮陶磁―茶道の継承と批判という視点から―」

討論：岩竹美加子（早稲田大学国際教育センター客員助教授）

咸東珠（梨花女子大学校史学科副教授）

司会：衛藤瀋吉

総合討論

司会：高柄翊（元ソウル大学校総長）

晩餐会

『新しい歴史教科書』をめぐって」において、扶桑社の「新しい歴史教科書」問題を、冷戦後の世界におけるナショナル・アイデンティティの再構築という共時的な現象の中に位置づけ、中国、台湾、韓国の最近の歴史教科書改変も、同様の流れによるものであると述べた。その上で、「歴史は科学ではなく、物語るものである」という氏自らの立場と見解を明らかにし、日本ナショナリズムの文脈によって書かれた「新しい歴史教科書」の問題点は、そのナショナリズムがかつてどこで間違いを犯したかについて書かれていないことであると論じた。また、ナショナリティの異なる国同士で歴史認識を「共有」することは不可能であるが、その違いを相互に理解するための装置としての学術交流の有益性に言及した。

第14回日韓・韓日合同学術会議（ソウル大・湖巖教授会館）

左から徳永和喜氏、松本健一氏、田代和生氏、馬越徹氏

第二セッション

「外から見た東アジア文化」

「薩摩藩の朝鮮通事―『漂流・漂着』と薩摩藩の対応―」で、徳永和喜氏から、江戸時代、薩摩藩において朝鮮通事の制度が維持されていた事例が紹介された。薩摩藩における朝鮮通事は、領内に漂着した朝鮮船の乗組員への聞き取り調査を行うことを任務としていたが、通事養成も含めた制度を維持していた背景には、漁船漂着の対応のみならず、さらに広範な朝鮮船の往来があったと考えられ、鎖国体制の下での通交体制について、薩摩藩から朝鮮国まで含む通交圏の再構築の可能性を示唆する事例であると述べた。

朴枝香（パク・ジヒャン）氏の「英国と東アジア―近代と前近代の出会い」では、イギリスの外務省資料の読解を通じ、十九世紀末から二十世紀初頭のイギリス知識人階級の日本と朝鮮に対する認識を比較して論じた。当時、イギリスの知識人階級は、一九一〇年代までは西欧化の優等生として日本を認識し、その急速な成長と社会的規律、愛国心を賞賛する論調がほとんどであったが、第一次世界大戦末期に、中国と東アジアをめぐるイギリスと日本の利害関係の対立が浮上すると、イギリスの対日認識は日本における近代性の限界を見つけ出すことにより、日本が決して西洋に追随できないという事実を確認しようとする論調に傾いた。その意識の根底には十九世紀前半の人種主義にそった他者認識の深化が存在したことを指摘した。一方で、朝鮮に対する英国人の認識は、当初から否定的で、無知で、間違った情報が蔓延していたが、それには、イギリスに入った朝鮮の情報が日本経由だったことも作用していたと示唆した。朝鮮に対する過小な評価は第二次世界大戦期まで変化せず、朝鮮人の統治能力への不信が、信託統治案を浮上させることとなったと論じた。

第三セッション

「東アジア文化に対する韓国と日本の認識」

崔元植（チェ・ウォンシク）氏の「ポスト65年のための断想―『秀吉一代と壬辰禄』を読んで」という発表で氏は、一九六五年日韓基本条約に象徴される、冷戦期の日韓関係を規定していた体制を「65年体制」と呼んだ。一九九八年日韓共同宣言によって日韓の新たなパートナーシップが謳い上げられながらも、現在も南北分断のため、依然として「65年体制」が強い力を持っていると論じた。「65年体制」を解体していく上での「建設の連帯」と

しての日韓の市民社会の可能性に期待し、歴史的経験の真正な共有のための、差異の発見と尊重に基づく歴史に対する相互理解と相互教育の必要を主張した。そして、歴史記述のひとつの可能性として、玄丙周『秀吉一代と壬辰録』を紹介した。この小説には、十六世紀末の朝鮮をめぐって東アジアで繰り広げられた壬辰倭乱の全プロセスとすべての局面が野談的に盛り込まれており、複眼的な視点で東アジア三国史をひとつの文脈の中に総合した稀有な例であると評価した。

竹中均氏の「柳宗悦と朝鮮陶磁―茶道の継承と批判という視点から―」では、茶道や柳宗悦の思想にあらわれる「高麗茶碗」「李朝」という日本人による呼称が、現実に朝鮮半島に暮らす人々の暮らしへの視点が欠けていた一方的な「名づけ」であり、個人の主観的な意図を超えて作用する「名づけの暴力性」をはらんでいると指摘した。また、近年の日本におけるアジア旅行ブームでは、植民地支配への反省どころか、オリエンタリズムや露骨なコロニアリズムが跋扈し、「かわいい」ものとしてアジアのエキゾチズムを消費していることを指摘し、柳宗悦の運動との共通性と、旅行経験が人格形成と無関係ではなくなりつつある現在において、柳宗悦の思想と業績を批判的に再検討することの必要性を論じた。

奎章閣　古文書の展示コーナー

討論においては、ナショナル・アイデンティティの背景としての歴史認識の他者との共有の可能性、歴史家／歴史学者としての歴史を語る態度について論点が集中した。

特に、東アジア三国の国民国家形成過程について、衞藤瀋吉氏から発展段階の異なるナショナリズムの衝突点として満州事変を捉える見方が提示されたが、それに対し、高柄翊（コ・ビョンイク）氏からは、加害と被害の立場でのナショナリズムの発現は同じではないとの指摘があった。今後、中国も含めた東アジア三国での国民国家形成過程に関する共同研究が期待されるとのコメントも出された。

奎章閣　古地図の前で

また、教科書問題については馬越徹氏から、日韓ともに全体で見れば教科書の記述自体はナショナリズム色を薄めつつあるにもかかわらず、今回教科書問題が起こった背景にはマスコミの言論行動のあり方が大きく作用した点を指摘し、教育界、政府間でももっと早期に対話をはじめる必要性があったとコメントした。

会議に先立っては、会場のソウル大学校内にある奎章閣を見学し、朝鮮王朝時代の記録を中心として、所蔵する古文書や古地図の説明を受けた。

もはや、日本・韓国のいずれも、他者の視線なくしては自己規定はなしえず、東アジアの中で交錯する自己・他者の視線とその関係性の中にのみ、「日本」「韓国／朝鮮」のアイデンティティが成立するのではないか。日韓間のさらに開かれた議論への可能性に期待しながら、最も近い他者の目によって自己をさらに深く省察する契機としてこの会議の意義が再確認されたことが、第14回の成果であったといえるだろう。

左から具汶列氏、崔元植氏、朴枝香氏

調査ノート

日本における韓国・朝鮮研究

学会編 ――研究大会レビュー

近年韓国・朝鮮研究者による各分野の学会・研究会の設立が相次ぎ、研究大会が毎週のように開催される秋はまさに「学会シーズン」と呼ぶにふさわしい活況を呈した。

それぞれの学会で質の高い発表が行われ、現在の日本の韓国・朝鮮研究の水準を示したほか、アカデミズムの側から、現実の日韓をめぐる諸問題へのさまざまなアプローチがなされたことが二〇〇一年の傾向であり、生きた学問としての日本の韓国・朝鮮研究の位相を示したといえるだろう。

今回の「調査ノート」では、朝鮮学会、朝鮮語研究会、朝鮮語教育研究会、朝鮮史研究会、韓国・朝鮮文化研究会、現代韓国朝鮮学会の六つの学会を取り上げた。なお学会の紹介は、二〇〇一年十～十一月の研究大会が開催された順に拠った。（文責　日韓文化交流基金）

●朝鮮学会

◆**会長**　橋本武人（天理大学学長）

◆**事務局**　天理大学朝鮮学科研究室内

◆**設立年**　一九五〇年

◆**対象分野**　語学、文学、歴史学、考古学、文化人類学

◆**学会誌**　朝鮮学報（二〇〇一年十月現在、第百八十輯まで刊行）

◆**活動状況**　学会誌『朝鮮学報』を年四回発行、年一回の大会を中心に活動。

◆**研究大会**

●**日時、場所**　十月六～七日（天理大学）

●**内容**

【公開講演】

●「韓国における角筆文献の発見とその意義――日本古訓点との関係――」小林芳規（徳島文理大学）

●「高麗時代の点吐口訣の種類とその読法について」南豊鉉（檀國大学校）

【研究発表会】

第一部門　語学分野　十名

第二部門　文学分野　十名

第三部門　歴史学・民族学・考古学・その他の分野　十名

★二〇〇〇年に発見された韓国の角筆文献に関する公開講演では、日本の訓点との関係性から交流の歴史が読み取れ、多くの研究者の関心を集めた。十月七日は語学、文学、歴史学などの三つの部門に分かれて学術発表が行われた。韓国からの参加者・発表者も多く、各会場において日韓両語により専門性の高い議論が交わされていた。

●朝鮮語研究会

◆**会長**　野間秀樹（東京外国語大学）

◆**事務局**　東京外国語大学朝鮮語学研究室内

◆**設立年**　一九八三年

◆**対象分野**　朝鮮語学

◆**活動状況**　月一回の研究会を開催し、平成十三年十月の朝鮮語教育研究会との合同研究会で第百八十回を迎えた。

●朝鮮語教育研究会

◆**事務局代表・世話人**　油谷幸利（同志社大学）

◆**事務局**　同志社大学言語文化教育センター油谷研究室

◆**設立年**　一九九九年

◆**対象分野**　朝鮮語教育

◆**活動状況**　年四回、全体会を開催しているほか、到達度、情報処理、文化論の各分科会が活動を行っている。

【朝鮮語研究会・朝鮮語教育研究会　合同研究会】

●**日時、場所**　十月八日（大阪府・吹田勤労者会館）

●**内容**

【研究発表】

●「日本語と韓国語における談話ストラテジーとしてのスピーチレベルシフト」金珍娥（東京外国語大学大学院）

●「韓国朝鮮語教科書の語彙調査」長谷川由起子（九州産業大学）、李秀昊（立命館アジア太平洋大学）

【パネルディスカッション】

●「韓国朝鮮語教育の問題点」

司会者　波田野節子（県立新潟女子短期大学）

討論者　呉大煥（名古屋商科大学）、岸田文隆（大阪外国語大学）、野間秀樹（東京外国語大学）、朴宰秀（朝鮮大学校）、福井怜（東京大学）、油谷幸利（同志社大学）

★研究発表では両研究会会員が朝鮮語研究と朝鮮語教育それぞれの分野からの発表を行った。パネルディスカッションは教育現場からの質問を受ける形で進められ、高校で韓国朝鮮語教育に取り組む教員の意見もまじえ、文法や正書法、教授法などについて活発な議論が交わされた。具体的な問題点に対する討論から韓国朝鮮語教育の現状が浮き彫りになり、朝鮮語研究・朝鮮語教育間の対話の重要性を再認識した。

●朝鮮史研究会

◆**会長**　北村秀人（大阪市立大学名誉教授）

◆**事務局**　［関東部会］一橋大学大学院社会学研究科　糟谷研究室、［関西部会］京都大学人文科学研究所　水野研究室

◆**設立年**　一九五九年

◆**対象分野**　朝鮮史

◆**学会誌**　『朝鮮史研究会論文集』（緑蔭書房発売、二〇〇一年十月現在、第三十九集まで刊行）

◆**活動状況**　関東と関西の部会で月例会を開催し、それぞれ研究報告を行っている。

◆**研究大会**

●**日時、場所**　十月二十～二十一日（学習院大学）

●**内容**

【シンポジウム】

講演「歴史教育と朝鮮史研究」

●「問われる歴史教科書、広がる歴史の対話―共生のための韓日のオデュッセイア（ODYSSEY）―」鄭在貞（ソウル市立大学校）

●「朝鮮植民地支配をどう教えるか―高まるナショナリズムの『居直り』史観に抗して―」目良誠二郎（海城高校・中学）

【研究報告】

統一テーマ「朝鮮の領域観と自己認識―前近代と近代との接点」

●「朝鮮王朝後期の歴史地理認識と疆域観」文純實（中央大学）

●「十八世紀末海浪賊騒擾事件に見る天主教の受容とその変容」鈴木信昭（富山大学）

●「朝鮮後期済州島漂流民の出身地詐称」六反田豊（九州大学）

●「朝清境界問題にみられる朝鮮の『領域観』―『勘界会談』後から日露戦争期まで―」秋月望（明治学院大学）

★シンポジウムでは二〇〇一年「歴史教科書問題」に関連した講演が行われ、学会としての問題意識を示した。統一テーマによる研究報告では、近世朝鮮における領域観の表象について、幅広い事例が報告され、ナショナリズムとの関連についての重要な示唆を得た。

●韓国・朝鮮文化研究会

◆**会長**　伊藤亞人（東京大学）

◆**事務局**　東京大学教養学部文化人類学教室

◆**設立年**　二〇〇〇年

◆**対象分野**　韓国・朝鮮の社会・文化の研究

◆**活動状況**　定期的に研究会を開催するほか、ニューズレター「韓国・朝鮮文化研究会通信」を発行。

◆**研究大会**

●**日時、場所**　十月二十七日（東京大学教養学部）

●**内容**

【研究発表】

●「植民地期朝鮮における宗教政策―『心田開発』を中心に」川瀬貴也（東京大学大学院）

●「韓国キリスト教労働運動の多面性：教会構成員の組織内アイデンティティとその権威を中心に」太田心平（大阪大学大学院／ソウル大学校大学院）

●「サハリン朝鮮人のアイデンティティー」崔吉城（広島大学）

【シンポジウム】

「韓国研究におけるフィールドのあり方」

●「福祉・医療現場でのフィールドワーク」株本千鶴（東京都立大学）

●「フィールドとしてのキリスト教・教会」秀村研一（明星大学）

●「日朝交流史のフィールド」田代和生（慶應義塾大学）

司会者　嶋陸奥彦（東北大学）、吉田光男（東京大学）

★「現場を重視する研究」をキーワードとして、幅広い分野の研究者が結集できる研究組織を目指す学会にふさわしい、フィールドワークの成果を生かした研究発表が目立った。シンポジウムでは、各報告者のフィールド経験に基づいた報告が行われた後、全体討論で方法論としてのフィールドワークのあり方、日本人研究者にとっての韓国というフィールドとその限界などについての議論が深められた。

●現代韓国朝鮮学会

◆**会長**　小此木政夫（慶應義塾大学）

◆**事務局**　筑波大学社会科学系古田研究室

◆**設立年**　二〇〇〇年

◆**対象分野**　現代韓国朝鮮の政治・経済・社会・国際関係など

◆**学会誌**　『現代韓国朝鮮研究』（二〇〇一年十一月現在、第一号を刊行）

◆**活動状況**　年一回の研究大会を中心に研究会、外部講師による講演などを行っている。

◆**研究大会**

●**日時、場所**　十一月十七日（慶應義塾大学三田校舎）

●**内容**

【研究報告】

●「『与村野都』の構図―民主化前韓国の政治的亀裂―」若畑省一（信州大学）

●「韓国における社会福祉と社会福祉研究」株本千鶴（東京都立大学）

司会者　深川博史（九州大学）

討論者　倉持和雄（横浜市立大学）、林成蔚（北海道大学）

【パネルディスカッション】

「IMF経済危機とその後の韓国の変容」

司会者　渡辺利夫（拓殖大学）

発表者　深川由紀子（青山学院大学）、大西裕（大阪市立大学）、倉田秀也（杏林大学）、橋本隆祐（日本経済新聞）

★現代の韓国および朝鮮半島をめぐる諸問題を扱う。従来の議論をさらに理論的かつ精緻に実証化する研究報告が行われた。パネルディスカッションでは、一九九七年IMF経済危機以降の韓国の問題について、経済、政治、国際関係の側面と、マスコミの立場からの問題提起を行い、全体討論を行った。

日韓共同研究フォーラム

日韓共同研究フォーラム第1次研究ターム、文化チームの論文集が二〇〇一年十二月に刊行され、「日韓共同研究叢書」の第5巻目となりました。今年度で第2次研究タームは研究成果の出版を残して終了し、来年度から新しい研究体制が発足します。

第1次研究ターム文化チーム論文集刊行

この論文集には、日韓の社会組織を比較研究しようという共同テーマのもとに十名の文化人類学者が参加しています。文化と社会はコインの表裏をなすようなもので、それぞれの社会に特有な文化的伝統が組織の実態や行動を大きく規定しており、また具体的な組織や人々の関わりを通して文化的伝統は捉えられるといっても良いでしょう。この巻で取り上げた組織は、家族や親族といった基本的なものから農村や都会における地域組織、経済組織、宗教組織、あるいは任意参加による組織までさまざまなものに及んでいます。

他の班と比べるとこの研究班の最大の特色は、参加している十名の研究者がいずれも相手の社会で既に長期間の現地調査を経験しているという点です。日本側の五名は皆が申し合わせたように古典的な農村調査から始めて、しだいにさまざまな新しいテーマに関心を広げてきましたが、韓国側のメンバーの中には初めから地方都市や企業組織を対象にしてきた者もいます。したがって、比較の視点に立ちながらも日本側は主として韓国を、韓国側は日本を対象とする分担形式をとりました。

文化人類学の研究においては、現地での長期にわたる生活を自ら体験しながら、社会・文化のさまざまな側面や現実に関心をはらって、できるだけ相対的に理解することを目指しています。しかし、同じく文化人類学といっても、日本と韓国とでは文化的な背景も異なりますから、自ずから両国の学風にはそれぞれ特色が見られます。しかしまた、異文化研究の専門家として、互いに「異文化を楽しむ」余裕が見られるのも文化人類学の特色のようです。全員が相手の言語にも通じていますので、打ち合わせや合同の会議にも通訳を必要としません。私たち文化人類学の研究者どうしがうまく交流できないようではいけないと思っております。

第5巻『韓日社会組織の比較』日本語版

東京大学教養学部教授　伊藤亞人

第3次研究タームへの助走——

両国のチームリーダーによる第3次研究ターム（二〇〇二～二〇〇四年）準備会合を開催し、リーダー間の顔合わせと、運営方針の確認を行いました（二〇〇一年十二月一～二日、東京・日韓文化交流基金会議室）。二〇〇二年五月に韓国・ソウルで総会を開催し、各チームでの研究に入ります。

●第3次研究ターム　チームリーダー

チーム名	日本側リーダー	韓国側リーダー
歴史1	渡辺浩（東京大学）	朴忠錫（梨花女子大学校）
歴史2	宮嶋博史（東京大学）	金容徳（ソウル大学校）
文化・社会	伊藤亞人（東京大学）	韓敬九（国民大学校）
文化交流史	濱下武志（京都大学）	崔章集（高麗大学校）★
市民社会	小林良彰（慶應義塾大学）	任[illegible]伯（高麗大学校）
政治・社会	服部民夫（同志社大学）	張達重（ソウル大学校）
国際関係	小此木政夫（慶應義塾大学）★	文正仁（延世大学校）

★は座長

日韓中高生交流事業
—鳥取県中学生訪韓研修—

基金が一九九九年度から実施している日韓中高生交流事業では、日本と韓国の各地の学校を訪問し、生徒同士の交流行事が行われています。今年度も、若い世代の交流が根づいてきていることを実感させる楽しい風景が繰り広げられました。

日韓中高生交流事業の一環として、鳥取県中学生訪韓研修団は、十月二十九日から十一月二日の日程でソウルを中心とした研修を行いました。鳥取県から選抜された中学生の一行は、到着の翌日から見学や体験学習を開始しました。

十月三十一日には、ソウル・石村（ソクチョン）中学校を訪問し、韓国の中学生と身近に触れ合い、楽しいひとときを過ごしました。

まず、日本側生徒代表は歓迎式のあいさつを事前に練習した韓国語ですべて行い、韓国側だけでなく日本側からも驚きと賞賛の声があがりました。

続く体験授業では、実際の授業や、石村中学校で普段取り組んでいる特別活動を一緒に体験しました。伝統礼節学習の体験では、伝統的な韓服を着て、両手を重ねて腰をかがめる正式なあいさつを繰り返し練習しました。また、民俗音楽のサムルノリ、フォークダンスを韓国の生徒と一緒に体験し、楽しみました。

交流の時間では、石村中学校の生徒が、サムルノリの演奏、伝統舞踊、現代的なヒップホップダンス、合唱など、普段の練習の成果を披露してくれました。日本の生徒はそれに応えて、日本の歌から「ふるさと」を、韓国の歌から「故郷の春（コヒャンエ　ポム）」を歌いました。

石村中学校でのプログラムは、短い時間の中にも韓国独自の伝統や、学校生活を体験できるように考えられたもので、また、プログラムの合間には、教室や校庭で日本の生徒が韓国の生徒に囲まれて連絡先を教えあう風景があちこちで見られました。

今回の経験が、日韓の若い世代がお互いの社会や両国関係に対し深い関心を持ち、自発的に学ぶ契機となることを願っています。

●研修日程

10/29
米子発　ソウル着

10/30
水原華城、韓国民俗村、利川陶芸村見学

10/31
学校訪問：石村中学校（ソウル）
歓迎式、合同授業（伝統礼節教育、サムルノリ学習、フォークダンス）、交流の時間

11/1
オドゥ山統一展望台、景福宮見学
ミュージカル「ナンタ」公演鑑賞

11/2
ロッテワールド見学
ソウル発　米子着

「もう、こんなにモテることはないと思う」（本人談）

韓国にお嫁に行っても大丈夫？

◆日本中高生訪韓研修実績

期間	男	女	合計	学校訪問日	訪問先
鳥取県中学生					
10/29-11/2	28	83	111	10/31	ソウル・石村中学校
大阪府高校生					
11/14-11/18	33	75	108	11/15	ソウル・ソウル高等学校

◆韓国中高生訪日研修実績（2001年10月以降）

期間	男	女	合計	学校訪問日	訪問先
第３陣（高校生）					
10/9-10/13	49	43	92	10/10	A/大阪府立天王寺高等学校 B/大阪府立勝山高等学校
第４陣（高校生）					
10/16-10/20	40	52	92	10/17	A/京都府立鳥羽高等学校 B/京都府立洛西高等学校
第５陣（高校生）					
10/23-10/27	35	57	92	10/24	A/京都府立洛水高等学校 B/京都府立商業高等学校

演奏者も観客も一体となった―
第3回全州散調フェスティバル

アルムアシア代表　康貞子

全羅北道全州市の伝統的韓国家屋保存地区で開かれた「全州散調フェスティバル」（二〇〇一年十月四日～七日）は、三回目を迎えた。

「散調」は、即興性の高い器楽独奏曲であり、韓国伝統音楽の中でも特に芸術性の高い音楽分野である。全州散調フェスティバルでは、散調を現代音楽としてとらえ、世界に広めるためには、世界から多くの音楽家やアーティストが集い、交流することが重要だと考えている。

英語と日本語の解説付きコンサート、「外国人のための散調」（10月7日、郷校にて）。韓国伝統茶と菓子でもてなした

「流派別大㐃散調」（10月6日、文化空間「茶門」にて）

そのため、フェスティバルには毎回隣の日本から音楽家を招いて交流を図ってきた。全州で日本のアーティストと触れ合う機会はそれほど多くはなく、日本に違和感をもっている人たちも多い。しかし、感動的な演奏を聴き、人柄に触れたとき、違和感は消え、友好的な関係に変わる。日本の演奏者自身も「散調」という音楽形態について考え、体験する機会となる。

散調フェスティバルは、道や国が後援する華やかで規模の大きいエキスポなどのイベントとは異なり、地域の特色をもつ専門的な音楽フェスティバルである。全州市は、朝鮮王朝の官衙のあったところで、小さいながらも気品と落ち着きのある町並みが残っている。ソウル、釜山から車で三～四時間という距離は、外国からの観光客が訪れるには少し不便である。全州散調フェスティバルは、音楽的な意味のほかにも、地方から文化を発展させることと、海外からの観光客が地方のよさ、つまり韓国のよさがまだ残っている素朴な人情に触れる機会をつくるところに意味があるといえる。

10月6日深夜に「茶門」で行われた座談会、「即興に関して」。副島輝人氏を囲んで、日本の尺八奏者中村明一氏、韓国の大㐃奏者ウォン・チャヒョン氏を中心に韓国と日本の笛の奏法について白熱した討論がなされた

今回、日本からは尺八演奏家の中村明一、ヴォーカリスト（天台声明）の桜井真樹子を含む、五名の演奏家、民族音楽研究家、プロデューサーがフェスティバルに参加した。

中村明一の演奏する尺八は、観客たちに深い感動を与える一方で、韓国の演奏者たちにとっては、驚きであった。どうしてあのような演奏が可能なのか？　演奏後の座談会では、専門的な質問がたくさん飛び出し、ステージでの演奏のみならず、ひざを交えた交流の大切さを改めて感じた。

最後のプログラムである、散調通りでの祭りは、この路地に住む住民や、様々な地域からの観客、外国人、プロ・アマチュアの音楽愛好家たちが一体となり、忘れられた村祭りを連想させるような光景だった。日本の声明を披露した桜井真樹子は思いがけなく、韓国の梵唄（仏教音楽）の声楽家と共に合唱することになった。パンソリコンテスト優勝の、全北大の学生のコンピューターゲームに題材を得た曲などが披露され、あたり一帯は笑いの渦となり、老いも若きも共に楽しんだ。

第3回全州散調フェスティバルの大きな成果は、民間主導のフェスティバルという認識を与えたこと、日本と韓国の「散調」性に的を絞った演奏や講演会・座談会が非常に高く評価されたこと、そして日本から多くの観客が訪れ、全州の伝統的な町並みや食べ物、文化に触れたばかりでなく、地元のボランティアとの心の交流がもてたことにある。地元の新聞からは、非常に専門的でありながら、大衆的な要素をもち、地域に根付いた文化フェスティバルとの評価を得た。

地方都市こそ、地方色を生かした国際的な交流を推進することが必要だと改めて感じた。そして地方の人たちが自負心をもてるようになることを願っている。

カン　チョンジャ

1985年より東京で韓国伝統音楽の紹介に努め、「散調シリーズ」を4年間行ったのち、日韓のフリージャズや伝統音楽の交流をプロデュースしてきた。98年より韓国に拠点を移して、99年第1回「全州散調フェスティバル」をプロデュース。地方での文化プロデュースの困難を乗り越え、やっと地方に根付き始めた。

「文化」をテーマに熱い議論
日韓地方紙交流フォーラム

フォーラム実行委員会事務局長／河北新報社東京支社編集部長　渡辺幸英

音楽、映画、ファッション、食べ物――。日本と韓国では、それぞれ韓国ブーム、日本ブームと言われるような、さまざまなジャンルの文化の浸透が進んでいる。中心となっているのは若者たちだ。その背景を探り、今後を展望することは、二十一世紀の両国の友好関係を築く重要なカギになるだろう。

今年で五回目を迎えた日韓地方紙交流フォーラムは、こうした狙いからテーマを「文化交流と若者たち」として、九月二十六日、仙台市の仙台国際ホテルを会場に開かれた。

テーブルを挟んで、日韓双方の記者が議論を交わしたフォーラム

このフォーラムは、新潟日報と韓国・大田日報の交流をきっかけに、報道を通じて日韓問題を広く市民に考えてもらおうと、両社が日韓双方の地方紙に呼びかけて一九九五年に始まった。当初は日韓それぞれ五社だったが、昨年からは日韓各六社、計十二社の参加で行われている。毎回テーマを設定し、各社からパネリストを一人ずつ出して討論する。討論自体は非公開だが、内容を特集面などの紙面で詳しく紹介する方法をとっている。

フォーラムは日韓交互に年一回開催し、主催国側が相手国側参加者を招待するのが原則。日本で開催する場合は、各社が持ち回りで幹事を務め、日本側各社の分担金で経費をまかなっている。今回は、日韓文化交流基金の助成を受けた。

今回のテーマを決めたのは昨年末。韓国における日本の大衆文化の開放が順調に進み、「かつてないほど良好」な日韓関係がそのまま続くと見られていた時期だった。しかし見通しは甘かった。歴史教科書問題、靖国神社参拝問題で、日本大衆文化開放措置は凍結され、日韓の交流事業は各地で中止に追い込まれる事態に陥ってしまった。フォーラムの議論は一体どんな展開になるのかと、正直なところ頭を抱えた。

しかし、コーディネーターを務めた成澤勝・東北大学東北アジア研究センター教授（韓国伝統文化論）の自在な議事進行と、若手・中堅記者を中心に選ばれたパネリストたちの率直な意見交換によって、日韓関係の摩擦はフォーラムの議論を逆に充実させることになった。

今回の日韓関係の摩擦は、文化交流をめぐる両国のさまざまな問題点を明らかにした。そして、こうした摩擦やトラブルを乗り越えていくために、市民レベルでの一層の交流が必要なことが、議論を通してあらためて示された。一方、歴史認識などをめぐる議論では、韓国と日本との意識のギャップの大きさも浮き彫りになった。

見開き二ページの各社の特集面は、幹事社の河北新報が配信した共通の記事で構成された。配信記事は本文だけで約五百行、それにパネリストの発言要旨、成澤教授の寄稿など、総行数は約九百行に及んだ。文化交流の面から見た日韓関係の現状や課題を、読者に十分伝えるものになったと思う。

二〇〇二年は韓国でフォーラムを開催する順番になっている。どんなテーマが選ばれ、どんな議論が展開されるのか。事務方としては、不安でもあり、また楽しみでもある。

わたなべ　ゆきひで

1946年生まれ。仙台市出身。東北大学理学部生物学科卒。1971年河北新報社入社。編集局整理本部副部長、編集局学芸部副部長を経て、2000年4月から東京支社編集部長。

日韓地方紙交流フォーラム参加社

●日本側
河北新報（仙台市）、新潟日報（新潟市）、静岡新聞（静岡市）、中国新聞（広島市）、高知新聞（高知市）、熊本日日新聞（熊本市）

●韓国側
大田日報（大田市）、江原日報（春川市）、光州日報（光州市）、毎日新聞（大邱市）、釜山日報（釜山市）、済州日報（済州市）

日韓地方紙交流フォーラムの歩み

●第１回
1995年5月16日、広島市
テーマ　戦後50年―新時代への提言
パネリスト　日韓10社の編集局長

●第２回
1996年10月23-24日、韓国・大田市
テーマ　ワールドカップ新時代と言論の役割
パネリスト　日韓10社の編集局長・論説委員長

●第３回
1997年7月8-9日、新潟市
テーマ　女性が築く新交流時代
パネリスト　日韓10社の女性記者

●第４回
2000年9月27-28日、韓国・大田市
テーマ　政治とマスコミ
パネリスト　日韓12社の政治関係部長

日韓文化交流基金事業報告

10～12月

●韓国図書翻訳出版事業―「韓国の学術と文化」シリーズ新刊

以下の図書が韓国図書翻訳出版事業の一環として法政大学出版局から刊行されました。

『韓国環境運動の社会学』（具度完著、石坂浩一・福島みのり訳）。

一九七〇年代に始まり九〇年代に花開いた韓国環境運動の歩みを綿密に分析・考察し、環境運動を経済成長と政治的民主化運動による韓国社会の構造的変動の一環として位置づける〈環境社会学〉の先駆的研究。環境問題への市民の取り組みを、国家と市民社会が均衡を維持し、政治的・社会的・経済的民主主義を実現していくための重要な契機として捉え、持続可能な社会のための環境政策を提言する。グローバルな環境危機に直面している我々にとって、経済成長と生産力中心主義（人間中心主義）の支配的パラダイムから、いかにして環境中心主義に基盤を置いた新たなパラダイムへの転換をはかるか、今日の環境運動に貴重な示唆を与える。

●訪日団

団体名	計	男	女	期間
釜山文化人	15	10	5	10/23-10/30
済州大学生	20	7	13	11/13-11/22
韓国高等学校日本語教員	20	6	14	11/20-11/29

●訪韓団

団体名	計	男	女	期間
大学生（1）	20	6	14	10/30-11/8
大学生（2）	20	11	9	11/13-11/22
大学生（5）	20	6	14	11/27-12/6

●二〇〇二（平成十四）年度上半期助成申請受付

二〇〇二（平成十四）年度上半期の助成申請期間は、二〇〇二年一月四日から二月一日までです。今年から、上半期申請期間に、既に事業計画が固まっているものについては、下半期を含む年度内全ての事業申請を受け付けております。なお、図書出版助成の申請は二〇〇一年十二月十五日で締め切りました。

●「2002年日韓国民交流年記念事業」名称付与について

二〇〇二年日韓国民交流年を盛り上げるため、二〇〇二年一月から十二月までに、政府および政府関連機関が主催・助成・後援する日韓両国相互で行われる事業、いずれかが相手国で文化紹介を行う事業に対して「2002年日韓国民交流年記念事業」という名称が付与されることになりました。

二〇〇二年中に、基金から助成・後援名義付与を行う事業についても、「記念事業」の対象になりますので、申請をご検討ください（基金への申請とは別途に、外務省への名称付与の申請が必要になります）。

「2002年日韓国民交流年記念事業」としての事業推進に関心をお持ちの方は、左記までご連絡ください。

外務省文化交流部政策課日韓文化交流準備室
電話〇三―三五八〇―三三一一（内線二三八五）

基金ホームページURL
http://www.asc-net.or.jp/jkcf
ホームページ　E-mail：jkcf@asc-net.or.jp
図書センター　E-mail：lib1jkcf@oak.ocn.ne.jp

●発行　(財)日韓文化交流基金
〒105-0001　東京都港区虎ノ門5丁目12番1号
虎ノ門ワイコービル3F
電話　03-5472-4323　FAX　03-5472-4326
●発行日　2002年1月10日